

特別レポート

文=三田村 麻季子 (JICA広報室)
写真=久野 真一 (JICA広報室)



はだしで暮らす 途上国の子どもたちへ

世界には、貧しさ故に靴が買えず、はだしの生活を余議なくされている子どもたちがたくさんいる。そうしているうちに足からばい菌が入り、破傷風などの感染症にかかってしまうことも少なくない。

日本国内でサイズが合わなくなった運動靴を集めて、途上国の子どもたちに贈る「スマイル アフリカ プロジェクト」。シドニーオリンピック・女子マラソン金メダリストの高橋尚子さんの呼び掛けにより始まったこのプロジェクトは、子どもたちが安全に元氣いっぱい走り回れるよう「夢」を与えるだけでなく、足から感染する病氣から「命」を守ることも目指している。

5月23日、このプロジェクトの一大イベントとして、ケニアの首都ナイロビで第2回ソトコトサファリマラソンが開かれた。

ソトコトサファリマラソンは、ケニア国内で環境保全の必要性を訴えることを目的に毎年5月に開催。今回の大会では、昨年引き続きQちゃんがフロントランナーを務めたほか、ロードライバーの篠塚建次郎さんがソーラーカーで先導した。マラソンの先導車にソーラーカーが使用されたのは、アフリカ大陸初の試み。太陽光パネルが張られた車体の周りにはたくさんの人々が集まり、排気ガスゼロの環境

ナクル湖国立公園を訪れた子どもたちと、元気に駆け出すQちゃん。ケニアは世界有数のマラソン大国。ここから未来のランナーが生まれるかもしれない

Qちゃんがケニアへ ～平和と自然環境保全のために一緒に走ろう～

ケニアの子どもたちに運動靴を寄贈する「スマイル アフリカ プロジェクト」。このプロジェクトの旗振り役となっている、Qちゃんこと高橋尚子さんは、今年5月、日本の人々の思いが詰まった運動靴を届けるため、再びケニアの地を踏んだ。

に優しい車に関心を寄せていた。マラソンには、JICAケニア事務所の職員や現地スタッフのほか、青年海外協力隊員らもエントリー。参加者は約2600人にも及び、大盛況だった。また、当日は敷地内にJICAブースが設営され、隊員によるあん摩マッサージのデモンストレーション、生計向上のため地方の女性と製作した民芸品などの販売も行われ、参加者の注目を集めていた。

美しい湖と フラミンゴを守るため

Qちゃん率いる「スマイル アフリカ プロジェクト」による子どもたちへの靴の寄贈は、ケニアで活動中の青年海外協力隊などを通じて行われている。今回の訪問中、Qちゃんは隊員と一緒に地元の小中学校を訪れ、子どもたちに直接、運動靴を手渡した。「日本で靴を寄贈してくれた子どもたちの温かい思いを届けることができました。この靴を履いて、ケニアの子どもたちにも、自分の夢を追いかけてほしいです」。

さらに、プロジェクトに協力している隊員の一人、ケニア野生生物公社(KWS) ナクル湖国立公園で活動している高橋美穂さん(環境教育)を訪ね、フラミンゴの一大生息地として知られ、ラムサール条約※にも指定されているナクル湖と湖に流入するマカリア川を視察した。



ソトコト サファリマラソンで、参加者に励ましのエールを贈りながら走るQちゃん。「マラソンを通じて、ケニアと日本人学校の子どもたちの間にも小さな国際交流が生まれています」

地域で最も海拔が低く、かつ閉鎖湖で水が流れ出る川が通っていないナクル湖には、地域の生活排水や廃棄物が流れ込んでくる。さらに、近年の気候変動の影響により水量の減少も激しく、水位低下のため、そこに生息するフラミンゴが近隣諸国の湖に移動してしまうなど、地域が直面する自然環境問題は深刻だ。

ピンク色のフラミンゴが連なる「美しい湖」の風景と、ビンヤベットポトル、靴などが河川から流入し、汚染の脅威にさらされる湖の実情を目の当たりにして、ショックを隠しきれない様子だったQちゃん。

「どこを見てもごみが散らばっていて、そのすぐそばには、フラミンゴが集まっている。本当に悲しいことです。10年後、美しいナクル湖の姿は残っているのでしょうか」

こうした状況を改善すべく、高橋隊員が所属するKWSの教育センターでは、「クリーンアップキャンペーン」と



足元を見ると、ほとんどがボロボロのサンダル。中にははだしの子もいる。ガラスの破片が落ちていたことも多く、生傷が絶えない



キベラスラム内の小学校で、日本から持ってきた運動靴を手渡すQちゃん。まだ十分きれいな日本の靴に、子どもたちも興奮気味



湖周辺のごみ拾いをしていると、すぐに両手がペットボトルや紙くずでいっぱい。「大自然に恵まれているにもかかわらず、環境保全の重要性を理解している人がまだまだ少ないんです」と高橋隊員(左)



ナクル湖に浮かぶフラミンゴの群れを眺めるQちゃん。この美しい鳥たちのすみかが、自然環境汚染により奪われつつある

称して、月1回、地域の子どもたちとともに、国立公園内のごみ拾いを行っている。「国立公園を訪れる子どもたちに、自然環境を守る大切さを伝えたいんです」(高橋隊員)。
しかし高橋隊員は、活動の中で感じる難しさをこう打ち明ける。
「子どもたちにどんなに自然環境の大切さを訴えても、家に帰れば親が平気でゴミを捨てています。そのような状況で、きちんと理解してもらうことはとても難しい。まずは『ごみを街や川に捨てない』という基本的なことから教えて、少しずつ意識の変化を促さなければならぬのです」
高橋隊員の活動も、Qちゃんの「スマイル アフリカ プロジェクト」もまだ始まったばかり。ケニアの豊かな自然環境を守るため、そして子どもたちが笑顔を届けるため、二人はこれからも走り続けていく。

※正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。条約締結国は国内で1カ所以上の湿地を登録し、ワイスユース(賢明な利用)を推進しながら、持続的な利用を促し、水辺の生態系の保全に取り組む。